

山彼のひし追兎



協和キリン社長 宮本昌志
みやもと まさし

「是がまあつひの栖か雪五尺」と小林一茶が江戸から戻った際に詠んだのが信州柏原（長野県信濃町）の情景である。北信五岳と野尻湖に囲まれた地域で雪が多い。私の故郷はこの信濃町から斑尾高原を越えて北西に位置する飯山市の最も北部にある山村である。この辺りでは千曲川の下流に向かって一里行くと雪のかさが一尺多くなるといわれ「一里一尺」という言葉がある。千曲川をもう少し下り信州と越後の境近辺が最も雪が多く、県境にあるJR飯山線の森宮野原駅は1945（昭和20）年に（少なくとも）鉄道の駅があるところとしては日本最高積雪7・85mを記録したことで有名である。

私は18歳までこのような豪雪地帯で育った。11月から雪が降り始め、年によっては5月の連休過ぎまで雪が残る。冬は裏山での野良スキー。春はコゴミ、ワラビや根曲がり竹のタケノコといった山菜採り。夏は家の横を流れている谷川でイワナやカジカ取りに興じ、秋にはアケビ、山栗、鬼クルミやブナの実といった山の幸を堪能した。昭和30年代から40年代のことであり、大都市とこういった田舎の差が大変大きかった時代だったと思う。大学に進学し、都会出身の友人とは育った環境がまるで違っていたことで驚いたことは枚挙にいとまがない。一方、それが自分の個性でもあり原点でもあるという感覚も持つようになった。

初めて上京したころは、飯山線と信越線に乗

り継いで上野まで数時間かかった。それが今や新幹線を利用すれば東京から2時間弱で行けるようになった。野沢温泉や志賀高原へのアクセスのハブとしても利用され、普通の光景になりつつあるがスキーシーズンにはたくさんの外国人が飯山駅でバス待ちをしているのを見ると、時代の移り変わりを実感する。実家のある山村は人口の減少と高齢化が進み、山の手入れがされなくなっており、私が子どものころよりはより緑が深くなりつつあるようにも思う。今年90歳の母が親戚に助けられながら一人で暮らしていることもあり、新年、5月の連休、お盆には日程を調整して帰省している。昔のように山の奥までというわけにはいかないが、それでも一人で裏山に分け入り、谷川や風の音を聞き、木々の肌のぬくもりを感じ、山菜や落ち葉の匂いをかぐと一気に小さかったころの自分に戻るような感覚になり、仕事に戻る気力が充実してくる。唱歌の「故郷」を作詞した高野辰之は飯山市の隣の中野市の出身であるが、まさに「忘れ難く、山は青く、水は清き」故郷である。



今年10月の台風19号による豪雨で飯山市も含め千曲川流域にも甚大な被害が出ております。今回の台風で被災された皆様に心よりお見舞い申しあげるとともに、一日も早い復旧を祈念しております。